

きたみほろべつ
北見幌別川水系河川整備基本方針

平成 28 年 9 月

北 海 道

北見幌別川水系河川整備基本方針

目 次

1. 河川の総合的な保全と利用に関する基本方針	1
(1) 流域及び河川の概要	1
(2) 河川の総合的な保全と利用に関する基本方針	3
2. 河川の整備の基本となるべき事項	6
(1) 基本高水並びにその河道及び洪水調節施設への配分に関する事項	6
(2) 主要な地点における計画高水流量に関する事項	6
(3) 主要な地点における計画高水位及び計画横断形に係る川幅に関する事項	7
(4) 主要な地点における流水の正常な機能を維持するため必要な流量 に関する事項	7
(参考図) 北見幌別川水系流域概要図	8

1. 河川の総合的な保全と利用に関する基本方針

(1) 流域及び河川の概要

北見幌別川は、北海道枝幸郡枝幸町と中川郡音威子府村の境にある屋根棟山（標高1039m）にその源を発し、枝幸町歌登地区の市街地で支川のオムロシュベツ川と合流し、さらに、ペンケナイ川、パンケナイ川などと合流した後、オホーツク海に注ぐ、流域面積426.4km²、幹川流路延長46.5kmの二級河川である。河川名の由来には、一説によると幌別はアイヌ語のポロ・ベツに由来し「poro-pet 大きい・川」の意と言われ、同名が多いので、この地域の旧国名の北見を附したと言われている。

流域は、北海道の北部に位置し、枝幸郡枝幸町の1町で構成されており、土地利用は約86%が山地で占められているが、牧草を主体とした農地としても広く利用されており、中流域には枝幸町歌登地区の市街地が形成されている。四方を山稜で囲まれた枝幸町歌登地区は、酪農が基幹産業であり、年末年始には牧草ロールを飾り付けた「開運みこし」が町中を練り歩く。

また、北見幌別川には多数の魚類が生息し、カワヤツメ、サクラマス（ヤマメ）などが確認されている。鳥類では、遡上するサケ科魚類を採餌するオジロワシの姿が見られる。

さらに、流域内には網走市と稚内市を結び地域経済を支える国道238号などの重要施設が横断していることから、本水系は道北地方の治水・利水・環境上、重要な水系に位置付けられている。

流域の地形は、主に小起伏山地及び大起伏丘陵地が占め、河川沿いは砂礫台地となっており、下流域には三角州性低地が形成されている。また、河口付近の湿原に存在する史跡「幌別川川尻チャシ」は、北見幌別川により岡島段丘から切り離された二つの独立丘陵上にあり、枝幸町の指定文化財となっている。

流域の地質は、上流域から中流域にかけて新生代新第三紀のペンケ層、タチカラウシナイ層及び枝幸層の砂岩などが広く分布し、河川沿いに新生代第四紀の河岸段丘堆積物である礫などが分布している。下流域は河川沿いに新生代第四紀の湿原堆積物である泥炭などが分布している。

流域の気候は、河口付近では夏冬とも乾燥した季節風により一年を通して晴天に恵まれやすく、冬には流氷が接岸する。内陸部に位置する歌登地区は、河口付近と比較すると秋冬の降水量が多い。流域内の歌登観測所における年平均降水量は、約1,300mm（昭和56年から平成22年までの平均値）と北海道の平均降水量と比較して多くなっており、年平均気温は約5℃と北海道の平均気温と比較して寒冷である。

上流域は、主にシラカンバーササ群落、トドマツ植林が分布し、河川沿いは牧草地として利用されている。河畔林は主にヤナギ類で形成されているが、一部にハルニレが混生している。森林性鳥類のコゲラや、河川周辺に生息するカワガラスなどが見られる。

河床勾配は約1/260～1/80で、河床は主に粗礫で構成されている。蛇行が繰り返され、瀬や淵にはサクラマス（ヤマメ）、所々に砂泥が堆積する箇所にはカワヤツメが生息し、河床にはカワシンジュガイが多く生息している。

中流域は、やや開放的な流れとなり、牧草地として広く利用されており、枝幸町歌登地区の市街地を貫流している。河畔林は主にヤナギ類で形成されており、鳥類では、キジバト、ニューナイスズメなどが見られるほか、河岸の崖地にはカワセミの巣穴を見かけることもある。

河床勾配は約1/740～1/290で、河床は粗礫や中礫などで構成されている。河岸に形成された淵にはエゾウグイ、サクラマス（ヤマメ）、スナヤツメ北方種などが生息し、河床にはカワシンジュガイが多く生息している。

下流域は、牧草地として広く利用されており、湿性の環境が広がる河口付近では河畔林は見られなくなり、一部に疎生のハンノキ林が見られる。鳥類では、ノビタキなどの草原性の種が多く、広域な自然草原に生息するチュウヒなどが見られる。

河床勾配は約1/4,000～1/1,000で、河床は細礫や中礫などで構成されており、河岸には砂泥の堆積が見られる。水際のヨシなどにはエゾウグイ、ウキゴリなどが生息している。秋にはサケ、カラフトマスが遡上する姿が見られ、サケ科魚類を採餌するオジロワシを見かけることもある。

北見幌別川水系における治水については、昭和30年代のはじめに浸水被害が毎年のように発生したことから、昭和36年から平成7年にかけて河口から約18kmの区間で改修工事が行われている。また、支川においても北見幌別川の合流点から、ペンケナイ川では平成4年から13年にかけて約3kmの区間、オムロシュベツ川では昭和56年から62年にかけて約2kmの区間で改修工事が行われている。しかし、整備水準が低く、

平成22年8月の豪雨により浸水面積約38haの被害が発生していることから、治水安全度の早期向上が課題となっている。

なお、本水系は過去において、高潮による被害は発生していない。

水質については、「公共用水域における生活環境の保全に関する環境基準」による類型指定を受けており、北見幌別川は全域でA類型、支川のパンケナイ川の一部でAA類型に指定されている。平成16年から25年までのBOD75%値の最大値は、北見幌別川の下幌別橋地点で0.8mg/l、支川パンケナイ川の簡易水道取水口地点で1.0mg/lとなっており、いずれも基準を満たし、良好な水質となっている。

河川水の利用については、支川パンケナイ川において、養魚用水、工業用水として利用されている。また、宗谷管内のサケ・マス増殖河川に位置付けられており、支川パンケナイ川、ケモマナイ川ではサケ、カラフトマスの稚魚放流が行われている。河川空間の利用については、地域住民が管理用通路を散策路として利用するほか、秋にはサケやカラフトマスの遡上を橋から観察する人々の姿が見られる。

(2) 河川の総合的な保全と利用に関する基本方針

河川の総合的な保全と利用に関する基本方針としては、水害の発生状況、治水の現状、河川の利用状況、周辺の土地利用状況及び河川環境の保全を考慮し、周辺地域の社会・経済情勢との調和や既存の利水施設等の機能の維持に十分配慮して、水源から河口まで一貫した計画のもとに、河川の総合的な保全と利用を図る。

災害の発生の防止又は軽減に関しては、北見幌別川流域が持つ社会・経済的な重要度と道内の他河川とのバランスを図りつつ、河道の掘削等を行って河積を増大させ、計画規模の洪水の安全な流下を図り、沿川地域の家屋や農地等を防御する。その際、多様な動植物が生息・生育・繁殖できる良好な河川環境の保全・創出に努める。

計画規模を上回るような洪水や整備途中の段階における施設能力以上の洪水に対しては、迅速な対応が可能となるよう、水防管理者等に対し河川情報等の確実な伝達やハザードマップ作成のための支援を行い、関係機関や住民と連携を図りながら洪水被害の軽減に努める。

また、河川周辺の土地利用状況等を踏まえ、防災等関係機関と連携を図りながら、必要に応じて、情報連絡体制等の検討や施設整備等を行い、地震・津波・高潮被害の軽減に努める。

河川の適正な利用及び流水の正常な機能の維持に関しては、養魚用水及び工業用水として利用されている現状を踏まえ、利水者等の関係機関との情報交換など連携を図りながら、適正かつ合理的な利用が図られるよう努める。また、水量・水質の把握に努め、魚類等の生息する良好な水環境の保全が図られるように努める。

河川環境の整備と保全に関しては、サケ、サクラマス（ヤマメ）等の魚類やカワシンジュガイ等が生息していることから、河道の連続性や瀬・淵等の生息環境の保全に努める。また、魚類や鳥類にとって貴重な生息環境である河畔林についても極力保全に努めるなど、現在の豊かな水辺環境を踏まえ、水際から陸域までの横断的な連続性に配慮し、治水面との整合を図りつつ、動植物の良好な生息・生育・繁殖環境の保全に努めるものとする。なお、在来の生態系への影響が懸念される外来種については、関係機関と連携し、必要に応じて対策に努める。

景観に関しては、流域の自然特性や社会特性等を踏まえ、周辺に広がるのどかな牧草地風景と河川とが総合的に融合・調和するよう親しみやすい川づくりに努める。なお、施設の整備にあたっては、時間の経過を考慮して、周辺の景観になじむよう配置、形態・材料・色彩等の選定を行い、その後のモニタリング調査に努める。

河川の維持管理に関しては、災害の発生の防止、河川の適正な利用、流水の正常な機能の維持、河川環境の整備と保全等の総合的な観点から、必要な措置を講ずるなど、適切な実施に努める。なお、実施にあたっては、平常時及び洪水時における巡視、点検を行い、河川管理施設及び河道の状態を把握するとともに、周辺の土地利用状況を踏まえ、治水としての機能や環境への影響を考慮したうえで、河道内の樹木、堆積土砂や河川管理施設の適正な管理を行う。

また、地域と一体となった河川管理の構築に向けて、河川に関する情報を社会を構成する多様な主体と双方向で共有し、各々の適切な役割分担のもと、より一層の連携・協働の取組を実施するとともに、環境教育への支援、河川愛護活動の推進に努める。

なお、以上の実施にあたっては、各分野の専門家や流域住民等の意見を踏まえながら、河川の総合的な保全と利用に努める。

2. 河川の整備の基本となるべき事項

(1) 基本高水並びにその河道及び洪水調節施設への配分に関する事項

基本高水のピーク流量は、流域の規模や社会的経済的重要性、既往洪水等を考慮して、見送橋基準地点において800m³/sとし、全量を河道に配分する。

基本高水のピーク流量等一覧表

河川名	基準地点名	基本高水のピーク流量 (m ³ /s)	洪水調節施設による調節流量 (m ³ /s)	河道への配分流量 (m ³ /s)
北見幌別川	見送橋	800	—	800

(2) 主要な地点における計画高水流量に関する事項

計画高水流量は、見送橋基準地点において800m³/sとする。



■：基準地点

計画高水流量配分図（単位：m³/s）

(3) 主要な地点における計画高水位及び計画横断形に係る川幅に関する事項

北見幌別川水系の主要な地点における計画高水位及び計画横断形に係る概ねの川幅は、次表のとおりとする。

主要な地点における計画高水位及び川幅一覧表

河川名	地点名	河口からの距離 (km)	計画高水位 T. P. (m)	川幅 (m)
北見幌別川	見送橋	14.3	14.35	80

T. P. : 東京湾中等潮位

(4) 主要な地点における流水の正常な機能を維持するため必要な流量に関する事項

見送橋地点における過去22年間(平成3年～平成24年)の平均低水流量は約 $3.2\text{m}^3/\text{s}$ 、平均渇水流量は約 $1.6\text{m}^3/\text{s}$ である。

見送橋地点における流水の正常な機能を維持するため必要な流量については、概ね $2\text{m}^3/\text{s}$ とする。

なお、流水の正常な機能を維持するため必要な流量には、支川の水利流量が含まれているため、水利使用等の変更に伴い、当該水量は増減するものである。

(参考図) 北見幌別川水系 流域概要図

